

役割語研究の現在

講演者



金水 敏 氏（大阪大学大学院文学研究科）

1956年、大阪に生まれる。大阪大学大学院文学研究科教授。博士（文学）。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。大阪女子大学文芸学部講師、神戸大学文学部助教授等を経て現職にいたる。専門は、日本語史（特に文法史）、役割語の研究。2006年に『日本語存在表現の歴史』で新村出賞受賞。主な著作として『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（岩波書店、2003年）、『役割語研究の展開』（くろしお出版、2011年、編著）、『シリーズ日本語史 文法』（岩波書店、2011年、共著）等。

概要

役割語とは、話者の人物像と緊密に結びついた話し方の類型をさす。例えば、「（そのことは）私が知っているのだ」という発話を「わしが知っておるのじゃ」と言えば老人、「わたくしが存じておりますわ」と言えばお嬢様や貴婦人、という具合である。役割語は言語的なステレオタイプの一つと考えることができる。その源泉は、現実の一部の話者の話し方に基づく場合もあり、また、まったく現実の話者と結びつかない場合もある（例：宇宙人やロボットの話し方、しゃべる動物の話し方など）。

役割語の概念は金水（2003）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（岩波書店）で一般的に広く知られるようになった。その後、論文集が2冊公刊され、関連して定延利之（キャラクター研究）、田中ゆかり（ヴァーチャル方言）らの研究書も刊行されている。

役割語研究は元来、学際的性質を強く帯びている。文法論、語彙論、音韻論、意味論、語用論等の言語内的な観点が研究の中核をなすことは当然として、方言研究、歴史研究、文学研究、社会学、発達心理学、ポピュラーカルチャー研究等のさまざまな隣接分野と深く関わっている。それ故に、多彩な背景を持った研究者が役割語に興味を示し、共同研究も進展しつつある。心理言語学者との共同研究による役割語の知識獲得に関する発達心理学的研究も進められている。さらに対照研究も重要な領域である。英語、ドイツ語、韓国語、中国語等との間で役割語を軸とした対照研究が進みつつある。これらの対照研究が進むことが、より質の高い翻訳を生み出すためにも重要であることは言を俟たない。応用的研究と結びつきやすい点も役割語研究の特徴の一つであり、日本語教育の立場から役割語に言及された恩塚、鄭らの研究も注目される。

役割語研究は、その概念が生まれてから十数年しか経っていない、若い学問である。しかし多くの研究者を惹きつける魅力を持ち、また応用の射程も広い。本講演では、役割語研究の現時点での達成をご紹介しますとともに、今後の発展の可能性をも提示して行きたい。